

■特集 ■戦後七〇年に考へる

落口直文「波蘭懷古」が軍歌になったこと 佐佐木朋子

ぼーらんどかいこ

i 福島安正の単騎遠征

明治二十五（一八九二）年二月、ベルリン公使館付きの武官だった福島安正は任期を終えるにあたって、単身愛馬にまたがり大陸を横断しながら帰国するという計画をたてる。ベルリン・ロシア・シベリア・モンゴル・満州を踏破し、ウラジオストクから東京に戻ったのは翌二十六年六月二十九日。一年四ヶ月、一万五千キロの旅であった。福島は情報将校で、旅の目的は大陸各地の民族的地理的その他様々な情報を得ることだった。

この企ては「単騎遠征」と呼ばれ、各地で歓迎を受けた。旅の経過は「偕行社記事」に明治二十六年一月から連載がはじまる。福島が旅行をつづけているあいだに、次のように単行本が複数出版されている。

明治二十六年三月刊の『福島中佐遠征日記』（海南文庫社）はウラジオストクま

での行路図を掲載しているが、本書の準備段階では、福島はアムール川沿いの街ブラゴベに到着する前であつたろう。巻末に「歓迎詩歌」として、黒川眞頼・小中村（池辺）義象の新体詩「福島中佐歓迎の歌」、福羽美静ら三人の短歌、政治家田中不二麿、中国文学者桂湖村ら九人の漢詩が載る。

黒川と小中村の新体詩は『国文』第四、『日本之少年』（ともに明治二十六年二月）が初出であろう。

同年五月『福島中佐遠征実記』（森川機一編）には、東京に帰るまでの地図が掲載されている。五月九日に福島は吉林に到着しているがウラジオストク到着はまだまだ先のことである。

こうした逐次報道されるジャーナリズムのおかげで、日本国民は福島の間で完成する日を待ち望むことになった。福島が凱旋した日、多くの人がその姿を見ようと参集したのである。

ii 単騎遠征と日清戦争と軍歌

前出の黒川と小中村の新体詩はその後『学生必唱軍歌集』（明治二十七年四月）に「福島中佐単騎遠征の歌」（黒川）、「祝福島中佐単騎遠征帰京歌」（小中村）とタイトルをやや具体的に変更して転載された。とくに黒川の詩は人気があり、野際馨の『福島中佐探検軍歌』（明治二十六年五月）は、福島がベルリンを出発するところから稿を起こす長大な新体詩集だが、巻頭に黒川の詩が掲げられている。黒川の詩はこの後も『日本新軍歌』（明治二十九年十一月）、にも転載され、単騎遠征のメルクマールになっていった。

福島の間業を讃えるのが創作動機だった黒川の新体詩は、日清戦争に向かいつつある時代のなかで「軍歌」として流布していたのである。

単騎遠征をテーマにして軍歌を作る動き